

第Ⅳ章 まとめ

今回の調査では第5次調査区（2トレンチ）において、第1面にて小規模な掘立柱建物、櫓列などの遺構を検出した。これらの遺構は先述した通り、中世の遺物包含層である第1層上面ではなく、その上層である整地層Ⅰの上面から成立していることが明らかとなった。この整地層Ⅰは地山の真砂土や風化花崗岩礫を含むことから、開削した地山を用いて人工的に整地されたものと推測される。また、調査区の西端では畔を挟んで同様な堆積土（7層）が確認されており、整地は区画を設けて計画的に行われた状況を示している。ただし、これら整地層Ⅰに含まれる礫は目の荒いものが多く、上面の仕上げにも丁寧さはないことから、その施工に拙速さがうかがえる。この整地層Ⅰからの出土遺物は確認されていないため、その施工時期は不明であるが、下層の第1層からは室町時代の遺物が出土していることから、それ以降になされたことがわかる。一方、この層の上位は褐灰色砂泥層で、耕作に関する土層と考えられ、さらにその上層は現代の耕作土である。すなわち、当調査地が室町時代以降、建物等の用地として利用されたのは整地層Ⅰ上面に限られる。この整地層Ⅰ施工の拙速さ、限られた使用期間、室町時代以降という時期を加味すると、これらの遺構はいわゆる戦国時代の所産であるとみることができよう。調査地南西には猪熊城と呼ばれる山城があり、これに関連した遺構の可能性もある。また、調査地から北西方向へ丘陵を登った地点には足利尊氏由来と伝えられる妙勝寺も存在しており、これに関連した遺構の可能性も否定できない。

第2面では小規模なピットを数基検出したが、建物等の遺構としてはまとめられなかった。しかしながら第2面の基盤となる黒褐色粘質土（第2層）からは弥生時代後期の遺物が出土しており、これらの土器を供給した遺構が近くに存在すると考えられる。第2層の堆積状況や地形的に見て調査区に近接した南西側に位置しているものと推測される。今回の調査では弥生時代と中世の遺物包含層とそれぞれの遺構を確認した。これらの成果から、調査地は尾根上に形成された棚田状の地形を呈しているが、この平場は弥生時代から受け継がれていることも明らかとなった。